

DNA分析結果

新たな研究の始まり

第1次発掘調査での人骨群の発見から18年を経た2018年、国立科学博物館、国立歴史民俗博物館、鳥取県の三者の共同研究により、青谷上寺地遺跡出土の人骨のDNA分析が始まりました。

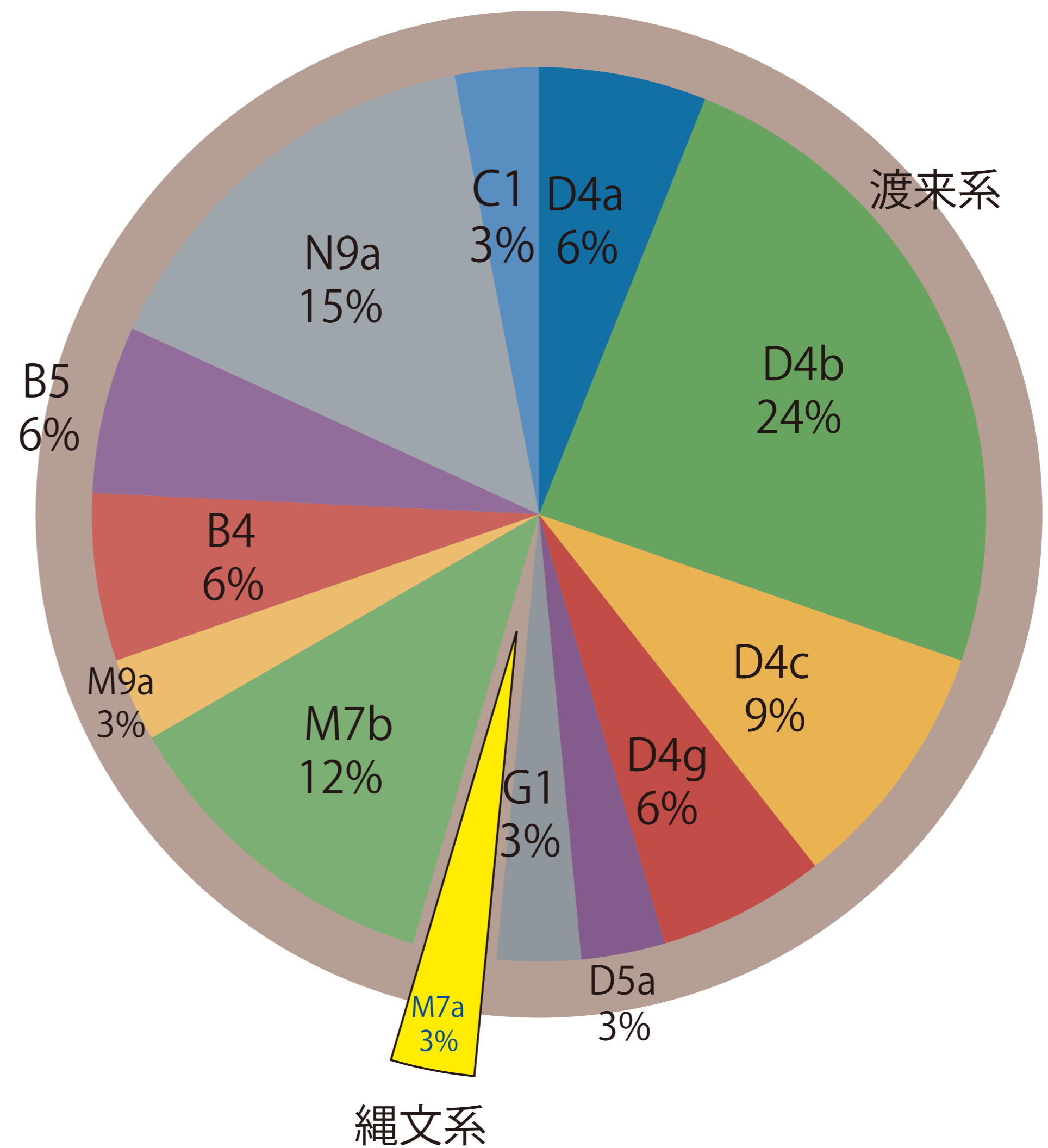
第1次発掘調査当時より分析技術が格段に進歩して、詳細なDNA分析やゲノム（人間一人分を作るために必要な遺伝情報のセット）の解析が可能になり、頭蓋骨から抽出したミトコンドリアDNAと核DNAの分析が行われました。

様々な人々が往来する青谷上寺地遺跡

人骨群中の32体の人骨から、ミトコンドリアDNA（母系の遺伝情報）の分析結果が得られています。うち31体が渡

来系（大陸系）の人のハプログループ（祖先が共通するハプロタイプ（遺伝子の変異の型）をもつ人の集団）、残り1体が縄文系（在来系）の人のハプログループであることが判明しました。ハプログループの比率が渡来系に偏っている点が注目されます。

また32体のうちに29系統の同一のハプロタイプがあることが判明しました。つまり母系を異にする（血縁関係にない）様々な人々が同時期に青谷上寺地遺跡に集まっていたことを示しています。人の流入が少ない地域では、同族の婚姻が増えてハプロタイプの種類が少なくなるのですが、多くの人々が往来する都市のような地域では、同時期に多数のハプロタイプが確認されます。日本海沿岸地域における交易拠点であった青谷上寺地遺跡を人々が往来していたことが窺われます。



青谷上寺地遺跡出土人骨（32個体）のミトコンドリアDNAのタイプ（ハプログループ）